



平成元年度の科学研究費（国際学術研究）で中国南部の調査を計画していたところ、天安門事件のため、急遽、調査国を変更しなければならなくなった。さて、どこにしようかと迷ったが、同じ社会主義国で中国南部と比較的よく似た環境の地域となると、これはもうベトナム以外に適当なところはない。というわけで、躊躇せず調査国をベトナムに変更した。天安門事件の余波で、というよりもそのお蔭でなかなか行けないベトナムを見ておくのも悪くはない、いや、むしろ「もうけもの」と言うべきか、などと期待しつつの変更届であった。

ところで、調査国を変更したものの、外国人の長期間の調査が難しいこの国の査証をどうやって手に入れるかが問題である。たまたま、京大農学部の特帯農学専攻にベトナム留学生がおり、彼がメコン・デルタの生成と土壌という研究テーマのもとに、故国へしばらく戻って研究資料を採集しようとしていた。渡りに舟というのはこのことで、早速、彼の研究指導のために訪問するということにして、出身校のカントー大学へ招請状を要請することにした。招請状は無事に届き、大使館での査証申請も思ったより簡単に済んで出発準備が整った。

バンコクから飛んで1時間半、ホーチミン市上空に近づくと、2月半ばの乾季の真っ最中にもかかわらず、水田や畑にはいろんな作物が植えられているのがよく見える。耕地を余すところなく利用するベトナムの耕地利用の特色が入国前から早速目に飛び込んできた。空港近くまで降りてくると、その周辺の耕地に大きな穴が無数に散らばっているのがよくわかる。ベトナム戦争の爆撃跡である。それを眺めていると、反帝・民族解放の激しい戦場となったこの国についてやって来たかという想いが湧いてくる。これからの調査への期待とともに、70年前後の

* Koji Tanaka, The Center For Southeast Asian Studies, Kyoto University

ベトナム側メコン・デルタ管見

田中耕司*

学生時代のさまざまな思い出がよみがえってきて、他の東南アジア諸国へ入国するのとはいささか異なった複雑な想いを抱きながらの入国となった。

空港に出迎えてくれた留学生とともに早速カントー大学へ向かう。国道1号線でホーチミン市からカントーまでは二つの大きな河をフェリーで渡らねばならない。メコン河分流の Tien Giang と Hau Giang である。乾季にもかかわらず水は豊富で、さすがに東南アジア最大の河川にふさわしい雄大さである。カントーはメコン・デルタ最大の都市で、ちょうどデルタの中心部に位置している。そしてカントー大学はメコン・デルタの農業研究の中心でもある。大学のゲストハウスに泊まり、調査予定を打ち合わせて、翌々日からフィールドへ出発となった。

社会主義国の例にもれず、ベトナムでも外国人の自由な旅行は制限されている。通常のツーリストの場合は限られた地域をツーリスト・ビューローの案内で回らなければならない。わたし達の場合は、留学生の調査予定地に全て同行するという名目があり、しかもあらかじめ彼が各省・県の人民委員会や科学技術委員会へ事前の訪問許可をとってくれていたのだから、メコンデルタのほぼ全域を自由に動き回れるという願ってもない条件で、到着早々なんの手続きもなく調査に出かけることができた。わずか1カ月の限られた期間であったにもかかわらず、結果的にはメコンデルタのほぼ全域を回ることができたのは、この留学生とカントー大学の準備のお蔭であった。

メコン・デルタには合計九つの省がある。メコン河の上流部から本流に沿って、An Giang, Dong Thap, Hau Giang, Cuu Long, Tien Giang, Ben Tre の各省が連なり、その西側、ジャム湾に面して Kien Giang, 南シナ海に面して Minh Hai の2省、反対側の北東部に Long An 省がある。メコン・デルタの全面積は5万9千平方キロ、そのうち約67パーセント、3万9千平方キロがベトナム側のデ

ルタである。

デルタは一面のまっぴらな平地ではあるが、微細にみると複雑な土地の起伏をもっている。本流沿いの氾濫原や新デルタ、海岸部の潮汐湿地や砂丘列、河の堆積で閉じ込められた広大な低湿地など、地形条件はさまざまである。また、土壌の面でも、肥沃な沖積土があれば、一方で海成の堆積物による酸性硫酸塩土壌や、塩性土壌があり、デルタの生成に従って複雑な分布を示す。水文条件も地域によって大きく異なる。雨季の洪水によって数メートルに湛水する深水地帯もあれば、季節的な洪水よりも潮汐運動による毎日の水位変化が卓越する海岸部低地もあって、微細な地形条件の違いに応じた複雑な水文条件が展開している。

南ベトナム解放直前の1974年に東南アジア研究センターのチームが行なった調査では、こうした複雑な水文・地文条件に従って、さまざまなタイプの稲作が行われていたことが報告されている〔『東南アジア研究』12巻2号、1974を参照〕。それによると、深水地帯の浮稲栽培、肥沃な新デルタの2回移植栽培、海岸低地の1回移植栽培、低湿地の無耕起移植栽培や開拓地の直播栽培などがあり、これらの大部分は雨季の降雨と洪水に適応した在来稲の一期作(Vu Mua)で、一部で当時導入され始めた高収量品種の二期作が広まりだしたというのが解放前の稲作の状況であったことがわかる。当時は、自然条件にうまく適応した伝統的な稲作体系が主流であった。

今回の調査の第一の印象は、こうした伝統的な稲作が解放後に相当な勢いで変化してしまったという点であった。ちょうどわたし達が訪れたのは乾季作の冬春稲(Lua Dong Xuan)が栽培される時期であったが、どの地域でもこの冬春稲が相当な面積で栽培されていた。言うまでもなく、乾季に栽培されるのは新しく導入された高収量品種である。また、乾季作が栽培される場所ではそのあとに雨季作が栽培されるので、そこでは二期作が行われていることになる。雨季作の高収量品種の栽培は夏秋稲(Lua He Thu)と呼ばれ、Dong Xuan—He Thuの二期作を行う地域がほぼデルタ全域に広く分布するようになっていた。浮稲地帯の栽培面積は解放後の15年間に急速に減少し、いまではAn Giang省とDong Thap省の一部に残るだけになったというし、2回

移植地帯も一部を除いて、すっかり二期作地帯に変わったという。事実、わたし達が観察したところでも、Dong Xuan—He Thuの二期作を行う地域が海岸部の一部を除いて相当な面積で広がっており、新デルタのもっとも肥沃な地域ではこの2作季の間にさらにもう1作の稲、春夏稲(Lua Xuan He)を無耕起で栽培する三期作さえも普及していることが確認できた。解放後の稲の多期作化は、わたしが想像していた以上の早さで進んでいた。

高収量品種への切替えと二期作の拡大を支えたのはポンプ灌漑の導入である。昔からメコン・デルタでは、運河の掘鑿がデルタ全面にわたって行われてきた。舟運と洪水調節のためである。解放後もこの運河掘鑿が盛んに行われており、いまま進行中である。こうしたデルタ全面に展開する運河網がポンプの設置によって灌漑源として利用されるようになった。そして、雨季の洪水のピーク時を避けて、その前後にDong XuanとHe Thuを栽培する作季転換がもたらされたのである。

水稻栽培の二期作化が進む一方で、大豆や野菜の水田裏作利用も盛んである。地域によっては、稲の二期作に野菜を組み合わせた三毛作が行われ、運河近くの高みの土地を利用した果樹や野菜の栽培も盛んである。こうした高みの土地を作るために、農民は頻繁に土や泥を積み上げていく。掘り出されたところは水路となり、運河からの水が引き入れられる。運河沿いの村々は、こうしてできた水路と土手や畝が複雑に入り組んだ水郷地帯となっており、運河の水を利用した集約的な野菜栽培の場となっている。ベトナム料理に欠かせないさまざまな生野菜が栽培されるのはこのような人為的な高みの土地である。



小舟で賑う運河沿い(ミンハイ省)

農業開発の勢いは凄まじく、かつての低湿地の森林はいまほとんど姿を消そうとしているといっても過言でない。解放戦線の根拠地となったデルタ南西部のウーミンの森などは、開田化政策によって昔の面影はほとんどとどめていない。また、強酸性土壌の低湿地であったヨシ原 (plain of reeds) へも急速に水田化の波が押し寄せ、移民による開墾が進んでいる。強力な開発の進行に対して、これ以上の自然破壊を食い止めるためにかつての森や湿地を保護、再生しなければならないという意見が政策側からも出ているほどである。

いまやデルタはほぼ全面的な開発の段階に達したといつてよいだろう。社会主義政権下での強力な農業政策がメコン・デルタにベトナム全体への食糧供給基地としての役割を担わせてきたが、疲弊したベトナム経済がはたしてここで生産される米や他の農産物を農民が納得する価格で買い上げることができるのかどうか。この15年間に大きく描き換えられたデルタの農業地図が、いまの姿のままで安定するかどうかはまだこれからの問題といえそうである。

ところで、以上のような農業技術の変化に加えて、ベトナムの人達が現在の困難な経済条件のもとでどんな暮らしをしているのかも、調査中、常に頭から離れなかった。激しいインフレでベトナム通貨が大きく下落したこと、ドイモイ（刷新）政策のもとで経済再建が進められていることなどはあらかじめ承知していたものの、実際に民衆の生活がどの程度のものなのかというのも今回の訪問の大きな関心事であった。

到着後まず面喰ったのは外貨の交換である。われわれの滞在や調査の経費は、カントー大学が一括して外貨で受取り、あらかじめ大学側が用意した現地通貨でまかなうという申出があったからである。おそらく、大学が独自に外貨獲得の努力をしているということだろうと了解して、結局はその申出に従ったが、大学でさえもこうして外貨獲得に励まねばならないところに、この国の経済の一端をかいまみちた思いであった。

農村部での調査に入ると、これまでの凄まじいインフレの名残ともいえる光景にしばしば遭遇した。農民が分厚い札束をこともなげにナイロン袋に入れて畦みちを歩いているし、茶店でもポケットから出

した札束を数えながら一杯のコーヒーの代金を支払う人を多く見かけた。これがタイやインドネシアなら、札束を持っていれば、それこそ腹巻ではないけれども、人目につかぬようシャツのなかに隠し持つはずであるから、いかに札束の値打ちがなくなっているかが判ろうというものである。圧巻は札束を運んでいる乗用車であった。後部座席、後部トランク、運転席の回りなどあらゆるスペースに札束を無造作に詰め込み、運転手とわずかに2人の婦人がそれを運んでいるのである。聞くところでは、宝くじの賞金を地方都市へ運ぶところだという。警護の人もなく、なるほどインフレというのはこういうものかとあらためて実感した次第であった。

ここまでインフレが進行し通貨の信頼度が低下すると、いま人気のモーターバイクなどは紙幣では売ってもらえないという事態にたち至っているようである。新しいバイクに乗る中年紳士は、フェリーを待つ間の立話に、このバイクは「金」を用意して買ったと回りの人達を気にする風でもなく語ってくれた。また、レストランやホテルでもむしろドルでの支払が歓迎されるということである。

こうした日常の些細なことからもこの国の経済がかなり深刻な状態になっていることがうかがえるが、いっぽうではラジカセやテレビなどの電気製品がホーチミン市や国境に近い地方都市でずいぶん豊富に出回っているのも驚きであった。大部分がタイからの密輸入品であるという話であったが、こうした商品の購買力が徐々にではあれ増大してきているのも現実なのであろう。地方都市の市場の食料品も豊富であったし、農家で覗き見た日常の食事もけっして貧しいものではなかった。

なによりも驚いたのは、小さな町でも旋盤を備えた鉄工所があったりして、少々の機械などは自力で修理する技術と技能を持つ人達が農村部にいることであった。経済の開放化と政治の刷新のもとで、勤勉な農民とこうした農村部の技術力が一体になれば、メコン・デルタが東南アジア第一の穀倉として国際市場に再登場するのもそれほど遠い将来のことではないのではなかろうか。メコン・デルタはそれほどに豊かな大地であるとの印象を抱いた1カ月の調査行であった。

(京都大学東南アジア研究センター助教授)